

# 海軍

## 吾れ水測兵として

愛媛県 渡部 忠 則

大正末期の不況のどん底に生まれた私は、八人兄弟の長男として生まれ、第一人、妹六人と両親、祖父母の十二人の大家族でした。家は農家でしたので、学校への入学には着物に草履ばきという姿でした。読本と算数の本、それに石筆、石判を風呂敷にくるんで、ななめに背中に背負って学校に通った。ちらちら雪の降った朝などは、草履がしめって、足先が切れるように冷たかったことを覚えて覚えている。

靴や服ができたのは小学三、四年生の頃であった。またカバンを買ってもらって、初めて服を着て靴をはき、カバンを掛けて学校へ行った時の嬉しい感じは未だに忘れられない。それは私の人生の中の嬉しい事の一つであった。毎日、往復六キロの通学路を通ったものでした。高等小学校となると、学校が違ったので往復十二キロの道を、別に遠いと言う感じもなく友達と楽しく通ったものだった。

高等小学二年の七月だと思う、支那事変が起きた。そして八月、突然父親に召集令状が来た。八月九日に入隊しなければならぬという。門口には「祝出征」の旗を立て、いろいろな方々に別れを告げ、大勢の町内の方々に見送られて勇躍出発

はしたものの、家族を残しての父の胸中は、いかにばかりであったろう。父を皆と駅まで送っての帰り道、こみ上げて来る淋しさに、木の枝にかじり付き、涙をこらえたのを覚えている。

今までのように甘えていた気分ではいられない。母を助けて少しでも働かなければならないと思っても、なかなか体の方がうまく動かなかつた。

昭和十四（一九三九）年四月、高等小学校を卒業。青年学校へ通いながら母を助けて懸命に働いた。祖父母は高齢で働くことはできず、家の留守居ぐらいが精いっぱいだった。

召集された父から便りが来た。上海派遣軍伴部隊和家隊に編入されたとのことでした。そして父の戦跡を見ると、

昭和十二年九月十六日、呉淞鎮に上陸。

九月二十五日、東唐家橋、十月十二日、南唐家湾、十月二十六日、廟行鎮、十月三十日、大場

## 鎮

と前進また前進を重ね、次々と敵陣地を占領して行った。父は歩兵で機関銃射手をしていたので苦労と危険はいつも身に迫っていたと言う。

十一月十八日滞浦鎮、十月二十日徐家巷、十一月二十二日福山鎮、十二月八日常熟、昭和十三年一月一日鎮江、一月八日南京入城、一月二十四日全椒縣、一月二十七日大馬廠

と進軍して行ったと言う。

ある時、多勢の敵に囲まれ、敵が一番ねらうのは機関銃の射手で、敵弾が雨あられのように射ち込んで来る中を、氏神様のお守りを口に喰えて、敵の包囲から友軍を守るのが我々機関銃隊の責務だと必死に応戦したと言う。その後父は岳陽戦、陽新大治、武漢、洞庭湖付近の攻略戦に参加、昭和十四年三月十二日、武昌にて帰還命令を受け、四月六日、松山第二十二連隊にて召集解除となった。父帰還の報に我が家はもとより、町の多くの方々が喜んで駅まで迎えに出てくれた。

支那事変に出征した父は幾多の戦闘にも参加、無事元気に帰ったようだったが、中国大陸の風土病とも言ふ「マラリア」におかされて、時折高熱を出して寝込む日が半年位あったようだ。ようやく元気を取り戻し、日常生活も順調になった。父は私達子供の教育やしつけは、軍隊式で厳しいものだった。

私は愈々二十歳を迎え、徴兵検査を受けることになり、検査官から甲種合格と言われ「男子の本懐之に過ぐるものなし」との感じがした。我が家は親子二代にわたって軍人家庭と評される事となったのである。父は陸軍、自分は海軍である。

昭和十九年五月十五日、多勢の見送りの人々に見守られながら、「御国の為に頑張つて参ります」と勇ましく郷土を出発し、相浦海兵団に入団した。

入団前から海軍の規律の厳しさと言うものは先輩の方からも聞かされていた。何事も絶対服従だと、びくびくせず腹をきめて入団第一夜を過ご

した。第二日目の昼頃だった。一人の兵隊が「ガラス」を破ってしまった。この者は「自分が破りました」と素直に言わなかったため上官の気分をそこね、そこにいた兵隊八人に「ビームにぶら下がれ」と言われた。「ビーム」とは吊り床を吊る鉄の鍵である。

ぶら下がっている者の中で腕の弱い兵士が一番先に落ちた。「貴様はたるんでいる」と言いながらバッテリーを取り出し、「向こうをむけ!」「両手を上げろ!」と命じて、バッテリーを持って尻を二回程打った。打たれた兵士は、うなるような声を出して痛そうであった。そして上官は他の者に向かって「よし下りろ、みんなよく聞け、お前達はこれから言うことを聞かないとバッテリーで思う存分打つてやる。一人二人たたき殺しても一銭五厘のハガキ一枚で来ているんだ。言う事を聞かないとたたき殺すぞ」と威嚇した。あとでそのバッテリーを見ると「海軍精神注入棒」と書かれていた。

その夜、上官が「お前達は良く聞け、海軍にはいろいろな科がある、希望者は自分の希望する科を選んで申し出るように」と説明した。

電信兵、信号、航海、通信、砲術、機関科、電測、水測等、明日の十二時までには、これにしようと思う科をそれぞれ申し出るようにと言われた。

海兵団にいるよりも学校に入った方が良からうなどとひそひそ話が聞こえる中で私も一つの科を選んだ。それは過去に映画で水測兵に興味を持ったためであった。海兵団の基礎訓練を受けながら水測兵の試験を受けたところ幸いにも合格することができ、横須賀の対潜学校へ行くこととなった。そして一週間の海兵団生活に別れを告げたのである。

昔ペリーが上陸したと伝えられる久里浜の近くにある対潜学校へ入校した。ここは静かな所で落ち着いた場所だった。一番驚いた事は今までの麦飯ではなく、白い飯に少し麦が入っている程度で、相浦海兵団の時は麦に米が混じっているとい

う状態だったので、部隊が変われば食事まで変わるのかと、何んとなく有り難い気持ちであった。

いよいよ新兵教育が始まった。徒歩訓練、手旗信号、カッターの漕ぎ方、結索、あらゆる必要な知識を身に付けるため少しの余裕もない。手旗信号など「できないと飯を食わさんぞ」との気合を入れられ、皆腹が減っているので真剣そのものであった。

そうした中で一八〇人の中から二人が小隊付伝令に指名され、私もその中の一人となって本部へ度々伝令に走ったものだった。何とか二カ月間の新兵教育を終え階級も一等水兵となり、同日第十五期普通科水測術練習生となった。練習生になっても「伝令の任務は続けよ」とのことで、防空演習の時など、防空壕の中で、海軍少将及川小四郎閣下をはじめ綺羅星のごとく居並ぶ将校の前で、分隊長の言葉を報告する時は何よりも緊張したものでした。

練習生の日課は、朝五時三十分起床、ハンモックの整理、掃除等をして朝の体操。全員上半身裸になって気合の入った体操で、心身を鍛えたのでした。自分は食事の時等は当番で、食事の世話をすることになっていました。

どこからともなく、こんな歌が流れて来た。

「いいじゃありませんか海軍は、かねの茶碗に竹のはし仏様でもあるまいに、一膳飯とは情けない」と。食事が終わると班毎に整列して教舎に向かう。八時より勉強である。主として電気学と音感教育である。習うことが細かいため、私的制裁厳禁と教頭から止められていたのでビンタを取られる事もなく勉強に熱中することができた。山の中で「カンテラ」やランプ等で過ごして来た私には驚くことばかりであった。

「同性のものは相反発して、異性の物は相受容する」という磁力線の原理から教えられた。電気勉強の最終には、仮称三式深信機の内部まで一切知らねばならない勉強であった。

この機械は電波を音波に変えて海中にはなすと障害物に会った電波は返って来て、電深の捕音機に当たり、電波となって深信機の「ブラウン管」に入り、螢の光が走るように右から左に移動する。メモリが刻まれているので障害物に当たれば、だんだんと形となってくる。その時発する音と、その光の形によって敵潜水艦であるか、海中の岩であるのか、また沈没船であるのか、魚の大群であるかを見分け、聞き分けするのが水測兵の任務なのである。音は空中では一秒間に三一四メートル、海中では一五〇〇メートル走ると教えられた。まだ正式に兵器に認定されていないため、仮称三式深信機と呼ばれていた。

もう一つは聴音機である。敵潜水艦の「スクリュウ」の音、魚雷発射の音、魚雷の進んで来る音、「ピストン」「タービン」「ジーゼル」の音、船の音、魚のなき声等を聞き分ける音感の知識の勉強が必要となったのだった。歌にしても教えられた。音感の時間となると、教官佐藤海軍少佐が

直接教育である。軍隊に入る前は学校で音楽の先生とか、背広の襟に少佐の襟章を着けステッキについて悠然と教室に入って来る姿は、この方の言う事は聞きもらすまいという感じを受けた。戦後知ったことだが、この少佐殿は有名な音楽家であつたようだ。

ピアノの鍵を三つ一緒に叩いて、これは何の音かと聞かれる。何のことかさっぱり解らない。教官はピアノを引く手をやめ「二十歳を過ぎて音楽教育は難しい。子供の頃からやらねばできないことなのだ。皆に子供ができたら十五歳までに音楽教育をさせる事が必要である。音楽は文化の発展と共に大切なことである。音楽ではドイツが世界一だが文化もまた世界一。ベートーベンやシューベルト等有名な音楽の大家は世界一の文化の進んだ国に仕向けたのだ。音楽を捨てた国の進歩はあり得ない。二十歳を過ぎても、今日の場合音楽を学ばねば多くの兵士と船を沈めてしまう事になる。真剣に取り組まねばならない」と説明された

のでした。この言葉に感動した一同は真剣にならざるを得なかった。

何の和音かが少しづつ分かって来ると、今度は和音の中から単音で聞き出す練習、ニョイのニエムフの「エ」を答えなければならぬ。真剣になれば恐ろしいもの、次第に皆も答えられるようになった。その上、律動音や線音による潜水艦の「スクリュー」の音、魚雷発射の音、魚の鳴き声等細かく耳の訓練をされた。

ドイツの潜水艦を使って訓練をした時、反響音が聞こえにくく、日本の潜水艦は、はっきりと聞こえる。ドイツ潜水艦には消音塗装がなされているため、これは科学進歩の差であることがはっきりしていた。短い期間に、むずかしい訓練を終えて第十五期普通科水測術（艦艇班）練習生教程卒業となり、各人希望する所へ行けと言うことになったので、私は最前線を希望した。

第二十五特別根拠地隊付を命ぜられた。「アン

ボニア島」である。二月二日、いよいよ十カ月間学んだ学校を後に佐世保に帰り、二月十九日、海防艦「志賀」の艤装員となり、「志賀」の整備が整ったので三月二十日「志賀」の乗組員となる。

いよいよ戦争もたけなわとなり、戦艦「大和」の出撃を前にして我が海防艦「志賀」に「前路を掃蕩し、敵艦を撃滅すべし」との命令が下令された。訓練も十分にすまず、艦内や探信機にもなじまない内に実戦とはと、皆の気合が耳に入る。四月六日、佐伯港を出撃した。もう一隻の海防艦「一九四号」が一緒だった。

我々水測兵に取ってはこの上もない重大任務である。舞鶴港で実戦訓練をする前であり教官がまだ付いていたので心強かった。豊後水道を掃蕩していると水偵より敵潜水艦を探知したとの知らせがあり、水測員全員殺気立って来た。海底の岩陰に隠れ「エンジン」を止めていればなかなか捕捉できない。そのうち何とか探知でき、爆雷攻撃を行ったところ少し油が浮いた程度なので、おかし

いと思い再び攻撃を加えた。今度はおびたしい気泡と油が浮いて約二キロに渡って流れている旨偵察機から通報が入った。撃沈確実と皆安堵の胸をなでおろした。

四月八日、対潜訓練を受けるため、佐伯港を出発した。十隻余りの艦艇は関門海峡を経て日本海に入った。間もなく一隻の艦が、敵が落とした磁気地雷にて破損した。その他の艦は無事で、四月十日頃舞鶴港に到着、入港したが、その後七尾湾に変更して敵しい訓練が続けられた。

七尾湾をあとに舞鶴港に立ち寄って艦の補修等を行い、五月末には舞鶴港を出港して対馬海峡の対潜掃蕩の任務に付いた。時々補給のため朝鮮の鎮海や麗水に寄港することもあった。二艦一組となって、毎夜六時頃、仮泊地を出港し、敵艦の探知掃蕩を続け、翌朝帰って来るのが毎日の任務であった。

哨戒中、対島の沖付近で敵艦を探知、追いかけて廻してようやく朝頃、敵艦は轟沈したのか動かな

くなった。油や気泡が大量に浮き上がって来た。艦内にある乾電池がこわれれば浮上する事ができない。潜水艦にはこれが一番こわいことらしい。

三時間余りも追いかけて廻してついに轟沈させたのだ。皆小踊りして「やった！ やった！」と喜んだ。私も深信機を使って追いかけて廻したのだから、大きな息のできる話で安心をした。しかし、振り返って敵の身の上になって見れば今頃は沈んで行った艦の中でどんなにして息絶えて居るだろうか、赤ひげもやはり人間だ、両親もあれば妻や子供もいるだろう。彼らも御国の爲だと頑張っていただろうに。そう思えば可哀想だ。だが戦争は殺らねば殺されるのだ。ゆるせ赤ひげ、これも皆戦争という惨忍な仕事のことだ。お互いにお国のため働いているのだ。海底に沈みし敵を思うや、いつしか「なむあみだぶつ」と祈った。

敵機の来襲は日毎に激しくなっていく。我が艦も時々戦火を交えたが、大事には至らなかつた。

ある島陰で木を切って擬装をしている最中に敵機に見付かってしまった。グラマン機が約四十機余り、次々とエンジンを止め急降下しては機銃掃射を浴びせる。爆弾はあまり落とさなかったが、それでも二、三発は島の松林の中に落ちて、松の木が裂けて吹き飛ばされているのが見えた。敵機は顔が見える程低空で機銃掃射をして来たが不思議に一発も当たらなかった。我々は木陰から応戦したため二機を射ち落としたと発表された。三、四十分程続いた戦いも、敵はあきらめたのか飛び去って行った。このような戦闘の時、平素は威張りちらかしている兵士も、物陰にかくれていて、「おとなしい兵士が、敢然と機銃にしがみ付き、敵機に向かって応戦する姿」と、後で話題となったものでした。

八月六日、広島に原爆が投下され、九日には長崎に投下されたとの情報を聞かされた。それから間もなく八月十五日、重大ニュースがあるから「全員甲板に集合せよ」とのことで、何事かと皆



不安な気持ちで集まったところ「日本は無条件降伏して敗戦」となり終戦を聞かされ、何とも言えない無念さと情けなきが一度に込み上げて来て、言葉さえ出ない状態でした。これからどうなるのだろうかと不安な気持ちをおさえて対島の浅海湾を出航して佐世保に帰り、今後の必要人員を残して、八月二十日から退艦が始まった。

そして我々は、戦友達と再会を誓って、それぞれ故郷への列車の人となった。自分は八月二十六日夕方、我家にたどり着いた。帰って見ると、三日前に可愛がってくれた祖母が亡くなっていた。もう二、三日生きていてくれたら会えたのにと、悔しさと悲しさで涙が止まらなかった。

その時母が良く無事で帰って来たねと、米の飯を茶碗に二杯も炊いて食べさせてくれた。供出等にてそれ以上は米が無かったと言う。農家に米がない、十人もの家族をかかえて食糧難の苦闘がはじまっていたのでした。

広々とした海の上の生活から狭い山合いのでの生活、もっと広い所で農業をやりたいと思いつながら、三百年も昔から先祖が住んで来たのだから、言い聞かされていたので迷いもあったが、今はただ食糧増産に腰をすえて取り組んでいる。そればかりではない。いろいろな共同事業、青年活動や消防団活動、変わり行く世相への研究、激しい林業等、次から次へと休む間のない日々が続いた。父母を助け、姉妹をかたづけ、ようやく自分が結婚したのが三十五歳であった。農林業一本で働いて来たができる限り、人の世話もやらねばと努力した。

戦後の日本の復興には若い青年の方々や青年運動を進め、自分も青年団長としてまたPTA会長、少年警察協助力員、民生委員等の役職を務め、表彰状や感謝状等を戴いた。

今思うに大正の末期に生まれ、不自由な生活から戦争の労苦、食糧難、物資の不足、農林業の下落、経済成長かと思つたら経済不況、多くの体験

を通して考えさせられる現今の世相。魂を失った若者の犯罪が多くなり、人の命を玩具のように思う自由のはき違い。ちょっとした苦勞にも耐えられない意気地なさが見られる。若者よ元気を出して頑張れと言いたい。

必ず来ると思われる自然消滅、何とかして食い止めるのが、今の日本人に課せられた使命ではなからうか。

戦争は絶対に起こしてはならないと誰もが思うのは当然で、戦争ほど罪なものはない。自分から戦いを起こす愚かさを充分自覚せねばならぬ、妻や子供が命あやうしと見たら決然と闘う主人こそ真の勇者と思う。

## 不沈戦艦「大和」の最後

香川県 風呂敏行

私は、昭和三（一九二八）年一月五日、香川県さぬき市津田町津田で生まれました。海軍少年兵に志願して、昭和十八年七月一日、佐世保の「相の浦海兵团」へ入団しました。当時十五歳でした。そして十カ月間、特別教育を受けました。

海軍の軍隊生活は予想以上に厳しい毎日の連続でした。何と言っても朝早く起こされるのが一番つらかった。叩かれることは挨拶と一緒に叩かれました。海軍はバツタでやられました。「軍人精神注入棒」で皆さん一緒だと思います。苦しい毎日を生き抜いて、一人前の軍人になれると信じて懸命に頑張りました。

相の浦の特別教育が終わると、今度は横須賀の海軍航海学校へ入り、運用術操舵練習生となりま